

第20回日本トラウマティック・ストレス学会
共催セミナー②



演題

「東日本大震災・原発事故後のPTSDを
合併した気分障害の症例について」

座長

前田 正治 先生

福島県立医科大学医学部 災害こころの医学講座
主任教授

演者

堀 有伸 先生

ほりメンタルクリニック 院長

日時

2021年7月18日（日）
10：45～11：45

開催

Web開催（学会URLからのご視聴になります）

共催：一般社団法人日本トラウマティック・ストレス学会



VIATRIS



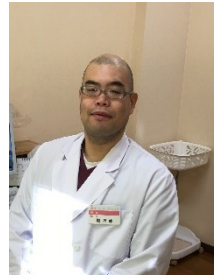
大日本住友製薬

○氏名：堀 有伸（ほり ありのぶ）

○所属：ほりメンタルクリニック

○略歴：平成9年 東京大学医学部医学科卒業

東京大学医学部附属病院分院神経科で精神科医としての研修を受ける。その後、首都圏の大学病院精神科、精神科病院、総合病院精神科などに勤務。平成24年から福島県立医科大学災害医療支援講座に所属して南相馬市の雲雀ヶ丘病院に勤務。平成28年よりほりメンタルクリニックを開業し院長となる。現在に至る



○抄録タイトル：東日本大震災・原発事故後のPTSDを合併した気分障害の症例について

○抄録本文：

2011年に起きた東日本大震災は、地震・津波が甚大な被害をもたらしたことに続いて、原発事故が起きたことによって複合災害となった。原発から20km圏内の住民を中心に政府の指示による避難が行われたが、この避難指示が解除されるためには4年以上の年月が必要だった。つまり、原発事故の被災地では、このような避難生活の継続や、放射線の低線量被ばくや廃炉についての不安、さまざまな社会的葛藤が刺激された状況が続き、コミュニティ全体の危機的状況が長期間継続した。これは、トラウマや精神障害に焦点づけた活動以上に、地域全体への広い支援を意図した広い（特異性の低い）活動の重要性が高かったことを意味している。発表者は、2012年4月に東京から福島県南相馬市に移住した。当初は震災によって一時閉鎖された精神科病院の再開を手伝いながら、地域住民と一緒に運動するイベントなどを実施するNPO法人による活動を通じて、地域社会への貢献を行った。

2016年4月に南相馬市にほりメンタルクリニックを開業したが、診療を行った中に少数ではあったが、強いトラウマ反応を示す症例が存在した。また、再発をくり返した気分障害の症例の中に、震災時に津波に遭遇したり遺体捜索に従事したために、強いトラウマを経験し、その場面の再体験症状が持続している症例がいることに気がついた。その後、PTSDに焦点づけた認知行動療法である持続エクスポージャー法を実施できる体制を整え、複数のPTSDを合併した気分障害の症例の治療に取り組み、十分な回復を認められる症例についても経験した。

一方で震災後10年を経過し、難治な経過をたどる症例においては、問題が複雑化していることを実感している。たとえば、震災前から被虐待やDV被害を受けていたという経験があり、その上で東日本大震災においてトラウマを経験したような症例である。このような症例に対応するためには、「市民活動」と「トラウマに焦点づけた認知行動療法」の中間にある一般診療の充実や、認知行動療法の技法の普及・啓発などが必要であるが、これは容易に達成できる課題ではなく、今後も関係諸機関が連携した上での粘り強い取り組みが必要である。

当日は東日本大震災・原発事故後のPTSDを合併した気分障害について、症例を中心に紹介する。